

# 子ども向けテレビ番組におけるジェンダーバイアスの変化

## —クックルンの挑戦—

樋口 汐織

ジェンダーバイアスという言葉がある。社会や文化が形成する性役割への固定観念や偏見のことを言うが、筆者は、ジェンダーバイアスは子どもが成長していく過程で無意識に植えつけられるのではないかと考えた。よって子どもが触れやすい子ども向けテレビ番組とジェンダーバイアスをテーマに研究を進めた。

ジェンダーバイアスは子どもの様々な選択肢を狭める。ランドセルの色、文房具のキャラクター、洋服、将来の夢など、性別によって本来望むものを諦める子どもも少なくない。よって、子どもが自分の人生で自由な選択ができるようにするために、子どもがする成長する家庭や教育現場において、ジェンダーバイアス的な表現や考えを取り除く必要があるのだ。

また、現代の日本にはどのようなジェンダーバイアスがあるのか、またこれまでの子ども向け番組にどのようなジェンダーバイアスが含まれ、子どもたちの選択肢を狭める可能性があったかを、様々な文献を用いて述べた。

一方、2013年より放送されている子ども向け料理・食育番組である「キッチン戦隊クックルン」には、これまでのジェンダーバイアスを克服する要素が多く含まれていると考えた。登場人物の男女比や対象とする視聴者、衣装の色やパーソナルカラー、悪役の組織的構造などの視点から、クックルンがこれまでの性別役割分業を覆す一步を踏み出していること、また子どもたちの選択肢を狭めないような工夫がされていることを、様々な資料や実際に視聴した番組の情報をもとに紹介した。

ジェンダーバイアスの観点を自分に向けられたり他者に向けられているのを見聞きしたりした子どもは、自身の選択肢が狭まると感じている。それに対しクックルンは、子どもたちにジェンダーバイアスを植え付けない工夫が多いことが分かった。これからの子ども向け番組に求められるものとして、子どもの好みや可能性を狭めることのないよう、多様な人物を登場させることではないかと結論付けた。

最後に、子どもたちの人格形成には親や教育現場の大人の振る舞いも大きく影響しているため、アニメやテレビ番組が変わるだけでは、子どもたちにジェンダーバイアスを植え付けることを解決することは出来ない。我々大人たちが今一度ジェンダーに関する認識を改め、行動を変化させる意識をする必要があるのではないだろうかと感じる。